

えびな・いちご文学賞

大賞ほか入賞作品決定

海老名市教育委員会では、今年のテーマ「健康、スポーツ、文化振興の年」の事業として、「えびな・いちご文学賞」と題し、文学作品（詩・小説）を広く県内から募集いたしました。

文学を通して多くの方々がひびきあうことを願いつつ、海老名の街や文化を主役または背景に、名産の新鮮なイチゴのような感性でつづられた作品、時代を見つめた作品をお待ちいたしました。結果、詩部門97篇、小説部門148篇、計245篇と、当初の予想を大きく上回る作品が寄せられました。応募者の年齢層は9歳から88歳と幅広く、地域別では海老名市、厚木市、相模原市をはじめ県内ほぼ全域から応募いただきました。

この場をお借りいたしまして、深く御礼申し上げます。ここに入賞者のご報告とともに、詩部門・小説部門それぞれの大賞作品（全文と選評（抜粋）を掲載いたします。ご一読いただけますと幸いです。

岡 指導室 235・4919

入賞者一覧

詩部門

大賞作品

（敬称略・佳作は応募順）

苺 一 会

【詩部門】
大賞 「苺一会」

優秀賞 広田 栄美 （横浜市）

「私のこと分かりますか」

砂山 雅英 （大和市）

佳作 「相模川」

桐本美智子 （伊勢原市）

【絆】

佐藤 美樹 （伊勢原市）

「昼の月」

富田 民人 （寒川町）

「いちごー生きるといことー」

浜田 正夫 （海老名市）

【小説部門】

大賞 「甲蔵さんの川」

優秀賞 苺田 淳一 （海老名市）

「白話草の風」

森田 恵子 （平塚市）

佳作 「イチゴが出来たら」

柳原 隆 （伊勢原市）

「山の名前」

小林 教子 （海老名市）

「川のある風景」

宇津木美紀子 （海老名市）

「鵜の洲」

相内麻由美 （愛川町）

選評【詩部門】

選考委員 清水 哲男

（詩人）

予想以上に（失礼）レベルの高い作品が多数寄せられたため、選考には苦勞しました。できればあと数人の方に賞を差上げたかったのですが、規定上それもならず、発表のよい結果になったことをご報告しておきます。今回選に漏れた方もがっかりせずに、次回を期していただければ幸甚です。

小説部門

大賞作品

甲蔵さんの川

苺田 淳一

まだ陽射しの柔らかいうちに電車を降りた甲蔵さんは、一年ぶりの風景に、はやる気持ちを抑えて改札を出た。

淡いグレーのジャンパーにオレンジ色のリュックを背負った甲蔵さんは、今年の秋には満八二才になるのだが、近頃だいが耳が遠くなったことを除けば、物忘れもさほどではなく、帽子の下の銀髪は驚くほど豊かで、足腰はまだまだしっかりしていた。毎年、梅雨入りも間近なこの季節になると、甲蔵さんは自宅のある目黒から私鉄を乗り継いでここ海老名にやってくる。

空は透きとおって雲ひとつない。近づく梅雨の気配など微塵も感じられない爽やかな陽射しのなか、甲蔵さんは『鮎見橋』と名づけられたアーチ状の美しい橋のたもとを右に折れ、河畔公園に足を運んだ。この公園は春先には土手沿いに支流の鳩川まで、満開の桜がそはみごとに続く、神奈川でも屈指りの花見処だが、盛夏を控えた今は、緑の樹々が、日ごとに輝きを増す陽光を受けて地面に濃い影を落とすのみで、辺りに人の気配はなかった。

木製のベンチにリュックを降ろし、甲蔵さんはそのわきにちよこんと腰かけた。目の前を中津川と合流したばかりの相模川が、ゆるゆると蛇行しながら流れている。上流の瀬は、玉石に浅い流れが砕けて白銀色に、そこと呼ばれる深場は空を映して濃い藍に、そこ

大賞の広田栄美さんの「苺一会」は、むろん「二期一会」という言葉のもじりと言うか、「二期一会」にかけたタイトルです。この作品を「詩」にしているのは、何といっても「苺はしずくの食べ物だよ」という絶妙なフレーズです。他に、こういう発想をした応募者はいませんでした。現在は「すっぱいまで」出会っている娘さんも、やがては自分から去っていくときがくる。そんな予感を覚えて、しかしいまの幸福をажわっている心情がよく表現されていると思いました。（以下略）



利用してカケバリのついたオトリ鮎を川に放ち、侵入者を排除しようと体当たりしてくる野鮎をかけるもので、大別すると、糸を緩めてオトリ鮎に自由に泳がせる『泳がせ』と糸を張り、鮎師が泳ぎを操る『引き』の二種類の釣法がある。甲蔵さんは『泳がせ』を得意とし、オトリ鮎の自由な泳ぎから、川の中の様子や野鮎の有無を読んだ。五〇年間の釣歴のうちで、甲蔵さんが『泳がせ』を伝授した人間は、数えるほどしかなかった。そういうえば初老の鮎師のむやみに長いあこと、備長炭のような極太の眉には、何やら見覚えがあるような気がしなくてもなかった。

いつの間にか渡る風が北から南に変わっていた。

やがて甲蔵さんはリュックから竹皮の包みと、あちこちが窪んだ銀色の水筒を取り出した。包みの中には塩むすびが二つと、たくわんが三切れ入っている。これを手に、毎年欠かさず相模川に通い続けている甲蔵さんだったが、九年前に妻が他界してからは、同居する長男の嫁が用意してくれていた。

（少し塩が足らん）
妻の作ったものとは味が微妙に違うと、甲蔵さんはむすびを口にするたびに思うのだが、嫁にはいわないままである。水筒の茶を飲み、むしゃむしゃとむすびをほおばっていると、土手を登ってきたのだろうか、先ほど上手で一尾かけた鮎師が、胸まで長靴から水を滴らせながら現れた。鮎師は甲蔵さんに気づくと、その顔をしげしげと見つめていたが、しばらくしておお、と声を上げた。

「梁瀬さんではありませんか！」
男の声は、耳の遠い甲蔵さんにも充分なほどの大音量だったので、甲蔵さんは、むすびを食べながら考えたが、どうにも男を思い出せなかったのだ。聞こえないふりをすることにした。

「剛田です。六年前、この川で『泳がせ』をご教授いただきました、その節は本当にありがとうございました」
友釣りは、なわばり意識の強い鮎の習性があるように、甲蔵さんは少し寂しそうに笑って

「甲蔵さんはベンチのリュックを降ろして剛田に座るよう促した。剛田はべこりと頭を下げ、自分の重そうなりリュックと小舟に似たアルミ製のオトリ缶とを甲蔵さんのリュックの横に置き、そこに鮎竿を立てかけて、隣に腰掛けた。西瓜の香りが強くなった。

甲蔵さんはリュックからマグカップを取り出し、水筒からお茶を注いで剛田に手渡した。剛田は礼をいってそれを受け取った。「最近お見かけしなかったの何かあったのではと心配しておりました。お元気そうですね」
もともと岐阜県郡上八幡出身の剛田は、二〇年ほど前、就職の都合で川崎に移り住んだのだが、幼いころ遊んだ故郷の川が何かにつけ思ひ出されて、一〇年前から鮎釣りを始めた。もともと川で育ったといっても過言ではない剛田だったが、どういうわけかその時まで本格的な釣りをしたことがなかったのだ。仕方なく我流で川立ちを続けていた時に甲蔵さんと出会ったのだった。

甲蔵さんに手ほどきを受けてからというもの、剛田はすっかり友釣りにハマり、ここ七年というものの、六月の解禁日から禁漁となる一〇月まで、少ない時でも月に五度、特に六月と九月にはほぼ毎土日、それ以外でも休みがとれば、迷わず鮎竿とオトリ缶を車に放り込み、相模川に通い続けているのだという。今日は竿を出さないので、との剛田の問いに、甲蔵さんは少し寂しそうに笑って